

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 山 崎 茂 会員数 約16,200人)

T E L 03-3393-1331

1 は じ め に

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の分析を終えて、ここ数年来の傾向を継承し、問題の内容やレベルともに教科書に準拠しており、日常の授業でほぼ対応できるものになっていることは、センター試験の本質を踏まえたものとして有り難く受け止めている。その一方で、例年指摘させていただいているように、解答するに当たっては、ほとんどの設問がリード文や図によらず、設問の文だけを読み、世界史の知識・理解のみで対処できるようになっている点が改善されていない点が残念である。

学力の3要素として、学校教育法第30条では「基礎的な知識及び技能」「思考力・判断力・表現その他の能力」「主体的に学習に取り組む態度」をあげている。これらを高等学校「地理・歴史」にあてはめてみるならば、歴史的事象を時間軸や空間軸など多元的な観点を踏まえた視点から検討したり、複数の事象間の関連や因果関係を考察したりすること、歴史的事象についての様々な解釈を比較してどちらにより客観性や妥当性があるかを考えたりすること、つまり歴史的思考力を涵養することであるといえよう。

センター試験では、基礎的な知識の確認はなされているものの、思考力・判断力の確認、すなわち歴史的思考力を発揮して解答に至るような問題という点においては不十分であると思われる。出題者の方々が意欲的にテーマ設定やリード文作成をしてくださっていることは、問題をみただけで十分に読み取れる。設問も一貫してそのテーマに沿うとか、リード文を熟読する中で解答のかぎが引き出されるような思考力を問う設問とか、リード文の全文を読まなければ解答できないなどの仕掛けを用意していただくことを、今後ともぜひ御検討いただきたい。同様に、地図や写真、図や表なども、また然りである。マークシート方式という制約があるにしても、もっと設問と関わらせる余地はあるのではないか。センター試験が、大学入試問題のスタンダードたるべく、さらなる御検討いただければ有り難い。

以下、今回のセンター試験「世界史A」と「世界史B」の試験問題について、限られた紙面の中ではあるが、御検討の一助となることを願って、本協議会としての意見と評価を記す。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

(1) 「世界史A」について

昨年度同様、「世界史B」との共通問題はなく、大問3題、小問33題であった。

時代別の出題は、正答の選択肢（二文正誤問題及び年代整序問題はそれぞれを数えている。）から判断すると前近代は11問、前近代から近代は1問、近代は13問、近代から現代は1問、現代（高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）「現代の世界史と日本」に該当する

部分)は8問、うち第二次世界大戦後史は1問(正答以外の選択肢を含めても5問)であった。昨年度と比べて現代史(とくに第二次世界大戦後史)の出題数が大幅に減った。また前近代史の割合が増え全体の3分の1を占める。これでは「近現代史を中心とする」学習指導要領の目標からも逸脱してしまう。

分野別では、政治史の知識・理解を問う設問が21問と大きな割合を占め、文化史が10問、社会・経済史が4問でほぼ昨年並みである。

問題形式では、正しい文を選ぶ設問が7問、誤った文を選ぶ設問が5問、選択肢の文の一部に波線部がある問題が2問、語句選択が4問、語句の組合せが3問、リード文中や設問で新たに掲げられた文の空欄に適語を補充する設問が4問、二つの文の正誤の組合せが7問、年代整序が1問であった。また地図と地名・語句を組み合わせる問題が3問で、人名と語句を組み合わせる問題は出題されなかった。図版は2点、地図は3点が使用されたが、グラフなどの統計や史資料は用いられなかった。

第1問 「歴史上の人や物の移動」

Aは元寇についてのリード文。日本史との関わりを意識させ、近年、注目されている寧波を絡めて東アジア貿易における日本・中国・朝鮮半島の地理的空間認識についても考えさせる内容で良い。問1はダウ船・ジャンク船の図版はどの教科書にも使われており良い。問2は東西交流についての設問で③のアギナルドは異質な感じがする。正答のイブン＝バットウータは記述されていない教科書もある。問4は誤文選択問題で、正答は前近代に関する記述である。問2、問4ともに「世界史A」の受験者にとっては難しい。

Bは大西洋三角貿易についてのオーソドックスなリード文。エンコミエンダ制は慣用句のように用いられているが、どの教科書にも記載されていない。削除しても文意は通るのではない。問6は地図を用いた問題。帝国主義時代のアフリカ分割についてはすべての教科書で地図が記載されている。「世界史A」の受験者でもこの程度の地図の内容はしっかり押さえる必要があるだろう。問7はキューバ危機に直面した大統領がケネディであるとわかればよい。

Cは移民についてのリード文。図版もついて考えさせる内容となっている。問8のマオリ、アボリジニは教科書の記載も少なく正答を導くのは難しい。問9はトマトがアメリカ大陸原産であると知っていれば解答は容易だが、その事が記載されていない教科書が複数ある。問11はエジプトのスエズ運河国有化宣言について理解していれば問題はない。

第2問 「世界史上の戦争と戦後処理」

Aは戦争の様式についてリード文。時代を経るにつれて戦争の規模が拡大する様子が簡潔に示されている。問1は匈奴について理解していれば解答できる。④の吐蕃は地図・図版には記載されているものの教科書の本文にはほとんど触れられていない。問3は地図を用いた問題。基本的な地理的認識があれば解答できる。

Bは戦争被害の統計についてのリード文。問5は年代について問う問題。設問の語句はいずれも教科書に記載されており良い。問6は選択肢aのオーストリア継承戦争は、記載頻度は高いもののプロイセンとの関わりについては言及されていないため正答するのは難しい。問7はアメリカの国際連盟不参加について触れていない教科書が一つあった。バルフォア宣言の記載

もばらつきがある。

Cはチェコスロヴァキア史についてのリード文。東欧革命後のドイツとチェコの戦後補償の課題まで触れている。問9の①ラダイト運動、②バグダード鉄道の敷設については触れていない教科書もある。正答に係る語句なので「世界史A」の受験者にとっては極めて難しい設問である。問10の選択肢bは教科書本文の記述は少ない。ただし第二次世界大戦のドイツの版図を示した地図は多くの教科書に記載されているため地図を読み取る力が試される。

第2問は設問全体を通して戦争という大きな課題について考えさせようとする作問者の意図が感じられた。

第3問 「世界史上の文化の交流や伝播」

Aは西域から中国への仏教伝播についてのリード文。問1はアショーカ王について理解していれば問題ない。問2の仏教の伝播については教科書の本文よりも図版で示されている場合が多い。問3は唯一の年代整序問題。年代を問う問題は、受験者は苦手としているが歴史事象の時間的推移や歴史的思考力を問う良問でもある。次年度からも出題数は少なくともよいので、年代整序のような受験者の実力を問う作問に挑戦してほしい。問4は日本史との関わりについても考えさせる良問。

Bはバグダードについてのリード文。イエシヴァ（ユダヤ教学院）はなじみのない語句だがリード文中のものなので問題はない。問5はアッバース朝期の年代についての問題。リード文中に8世紀と示されている。問7はイスラーム文明についての記述は教科書によって様々であり、またアラベスクを記載していない教科書も多いので「世界史A」の受験者にとっては難しい。問8は単純な語句選択でルネサンスが分かればよいのだが、シュルレアリスムやジャポニスムなど教科書頻度は極めて低い。

Cは聖ヤコブ（サンティアゴ）についてのリード文。問10は地図を用いた問題。二都市の位置が分かればよい。問11はいずれの語句も教科書頻度が高く、二文正誤で考えさせる設問となっており良い。

第3問は設問11問中の7問が前近代に関わる問題で「世界史A」の受験者を大いに悩ませただろう。

最後に全体を通してだが、今年は前近代に関わる出題が多く、学習指導要領の「現代の世界と日本」に該当する内容の出題が昨年比で少なめであった。ほとんどの教科書に掲載されている事項を正答とするように工夫なされている問題も多かった。しかし、残念なことにまだ一部、教科書本文にはほとんど記載されていない事項を正答する問題があった。何度もお願いしていることであるが、「世界史A」を作問される先生には学習指導要領を熟読の上、各社の「世界史A」の教科書を精査した上で作問に当たっていただきたい。

設問中の語句から教科書記載の頻度が少ないものを抜き出してみると、第1問では、問2のイブン＝バットゥータ、問4の交鈔、リード文Bのエンコミエンダ制、問5のキープ（結縄）、問7のサッチャー、レーガン、ヒンデンブルク、問8のマオリ、アボリジニ、問9のトマト、バナナ、問10の移民法、問11のコンゴ動乱、第2問では、問1のパルティア、スキタイ、問2の苦力（クーリー）、問7のバルフォア宣言、問8のカロロヴィッツ条約、問9のラダイト運動、バグダード鉄

道、第3問では、問6のジズヤとハラージュ、問7のアラベスク、問8のシュルレアリスムとジャポニズムと多岐にわたる。世界史の指導に携わる者にとって分かって当然の基本問題に思えるが、実は「世界史A」の教科書記述では触れられていないものも多い。「世界史の受験者なら知っていて当然」という固定観念にとらわれず、受験者の実情を理解して不利にならないように配慮して欲しい。

「世界史A」での受験者は「世界史A」専用の参考書などがほほないなかで、教科書のみで学習する人が多いと考えられる。一方、「世界史A」の教科書は、「世界史B」に比べて各社の特色が色濃くでており、記述内容は様々であり、取り上げられている事項も異なる。その上、単位数の少ない「世界史A」の作問は大変困難であることは承知しているが、是非とも「世界史A」で受験する生徒の立場に立った問題をお願いしたい。

(2) 「世界史B」について

今年度も、例年どおり大問が4問、学習指導要領を反映して大問ごとにテーマ設定がなされている。各大問とも3問からなる三つの小問に分かれ配点が25点、計36問で100点であり、ここ数年間の出題傾向を踏襲し、「世界史A」との共通問題はなかった。

出題を時代別に見ると、正答となる選択肢から判断するに、古代に関わるものが3問、中世に関わるものが5問、近世に関わるものが4問、近代に関わるものが6問、現代に関わるものが10問、古代と中世に関わるものが2問、古代と近代に関わるものが1問、中世と近世に関するものが1問、近代と現代に関するものが4題であった。また地域別にみると、東アジアに関わるものが6問、東南アジアに関わるものが2問、南アジアに関わるものが3問、西アジアに関わるものが3問、ヨーロッパに関わるものが14問、北アメリカに関わるものが3問、オセアニアに関わるものが1問、東アジアとヨーロッパに関わるものが2問、ヨーロッパとアメリカに関わるものが1問、3地域以上に関わるものが1問であった。

出題形式で見ると、正しい語句を選ぶものが3問、穴埋め語句を問うものが1問、穴埋め語句の組合せを問うものが9問、年代整序が2問、年表で時期を選ぶものが3問、文の正誤文を選ぶものが8問（うち誤文を選ぶものが4問）、2文の正誤の組合せを問うものが8問、位置を選ぶ地図問題が2問であった。

第1問 「世界史上の危機」

Aでは、安氏の乱から滅亡までの唐に関連して出題されている。問1は、黄巢の乱と朱全忠を問う穴埋め語句の組合せを問う問題。問2は、世界史上の危機に関する正文選択問題。問3は、両税法に関する2文の正誤の組合せを問う問題。いずれも基本的な問題で各選択肢の正誤の判断もつけやすい。

Bでは、世界恐慌が東南アジアの植民地に与えた影響に関連して出題されている。問4は、東南アジアの近現代に関する年代整序問題。問5はジャワに関する誤文選択問題。ともに正解がはっきりしており判断しやすいが、東南アジア史を苦手とする受験者は戸惑うかもしれない。問6は、貿易に関する2文の正誤の組合せを問う問題。基本的な事項を問うもので、選択肢も適切である。

Cでは、ヨーロッパの統合に関連して出題されている。問7は、ヨーロッパの統合に関する

短文の穴埋め語句の組合せを問う問題。問8はベルリンのソ連占領地区を選ぶ地図問題。各国の占領地区を覚えていなくても、ソ連地区＝「東側」という発想ができれば解ける。問9は、EUの共通通貨を問う選択問題だが、世界史というよりは一般常識のレベルであろう。

第2問「世界史における家族や社会集団」

Aでは、遊牧民と漢人の有力者に関連して出題されている。問1は、モンゴル帝国のクリルタイに関する文章の穴埋め語句の組合せを問う問題。問2は、漢人社会に関する正文選択問題。問3は、ユンカーと九品中正に関する2文の正誤の組合せを問う問題。いずれも基本的な事項を問うもので、選択肢も適切である。

Bでは、ブタペストに関連して出題されている。問4は、いわゆるカースト制に関する穴埋め語句の組合せを問う問題。問5は、東フランク王と神聖ローマ皇帝に関する2文の正誤の組合せを問う問題。問6は、グプタ朝の文化に関する誤文選択問題。いずれも標準的な問題で、きちんと学習していれば判断は容易。

Cでは、合衆国の奴隷制に関連して出題されている。リード文で使われている奴隷の競売の図版は大変興味深い。問7は、ストウ夫人とリンカンを選ぶ穴埋め語句の組合せを問う問題。問8は、合衆国の労働者に関する2文の正誤の組合せを問う問題。問9は、女性参政権が認められた時期を選ぶ問題で、時期を区分する事項が適切。いずれも基本的な事項を問うものである。

第3問「歴史上の国際関係」

Aでは、16世紀のスペインに関連して出題されている。問1は、フェリペ2世に関する文章の穴埋め語句の組合せを問う問題。問2は、スペイン内戦に関する2文の正誤の組合せを問う問題。問3は、外交史に関する正文選択問題。いずれも標準的な問題で、きちんと学習していれば判断は容易。

Bでは、戦争の違法化に関連して出題されている。問4は、19世紀末から20世紀初頭の国際関係に関する文章の穴埋め語句の組合せを問う問題。問5は、第一次世界大戦の講和条約に関する正文選択問題。誤りが明確で判断しやすい。問6は、ニュルンベルク国際軍事裁判の時期を選ぶ問題で、時期を区分する事項が適切。いずれも基本的な事項を問うものである。

Cでは、香港に関連して出題されている。問7は、中華人民共和国の外港に関する年代整序問題。基本的な問題だが、正確な知識が要求される。やや難か。問8は1990年代の出来事に関する誤文選択問題。判断は容易。問9は、マカオの旧宗主国を問う問題。易。

第4問「世界史における過去の認識」

Aでは、イスラームの歴史観に関連して出題されている。問1は、メディナの位置を問う地図問題。ウンマ→メディナ→位置という思考判断が必要。問2は、イスラーム神秘主義の名を問う単純な問題。問3は、人文主義と王莽に関する2文の正誤の組合せ問題。いずれも、基本的な問題。

Bでは、ソ連の歴史観に関連して出題されている。問4は、ピョートル1世に関する2文の正誤の組合せ問題。問5は、歴史書とその著者の組合せを問う問題。問6は、ドイツの植民地を問う問題だが、消去法的に解く受験者が多かっただろう。いずれも基本的な知識を問う問題である。

Cでは、ユダヤ人への迫害に関連して出題されている。問7は、世界史上の迫害や抑圧に関する誤文選択問題。判断は容易。問8は、ドイツ占領下のフランスに関する文章中の2つの穴埋め語句の組合せを問う標準的な問題。問9は、パリ＝コミューンの成立時期を問う問題。基本的な問題である。

例年指摘しているように、入試問題に求められているのは、落とすための問題ではなく、受験者の高等学校における学習活動や成果が評価されるような問題であり、本稿におけるセンター試験問題の評価もかかる視点によるものである。今年度も昨年度同様、学習指導要領や教科書の記述量に比例した問題の配分に十分配慮された出題であることと、出題の形式・内容について、全体的に奇をてらうことなく受験者に対して親切で、言わば「定番」とされる問題が出題されており、まさに「入試問題のスタンダード」といえる作題である。全体として、高校で学んだことをきちんと理解している受験者にとっては解きやすく、勉強していない者は正答できないという良問が揃っている点が高く評価できる。次年度以降も、同様な作題をしていただくことを切に願うものである。

例年どおりリード文もよく練られており、受験者に対して歴史的な考え方を喚起するように工夫されていて好ましい。しかしながら、そのリード文や使用された写真等が必ずしも問題に直結せず、単なる参考・興味付けになってしまっているものが散見されることは残念である。

配点に関しては、例年通り3点の問題が28問、2点の問題が8問であった。この8問の形式・難易度は一定ではなく、3点の問題との軽重が明確でない。

今年度の「世界史B」の平均は68.38点で昨年に比べ5.85点上がった。おそらく出題に際して60点前後の平均点を想定されていると思われるので、出題者の意図よりはやや高めの結果であろう。今年度は単純な4択問題が例年より多かったこと、大問1の問9のような一般常識レベルの問題があったことが、平均点を押し上げた理由とも考え得る。しかしながら、全体として高等学校における学習活動や成果が反映された良問であることが、高い平均点をもたらした要因であると評価できる。出題者の方々に深く敬意を表したい。ただし、平均点の推移は受験者にとっては死活問題であるので、次年度以降、平成19年度から20年度にかけて平均点が9点近く急落した徹を踏むことがないように御配慮いただきたい。また、他科目、特に「日本史B」「地理B」の平均点との差が3.3点で、おおむね小問1つの差に留まっており、受験者にとっても「学力」が正当に評価される結果となった。この点については、ここ数年間指摘させていただいた点を考慮していただいたということで、高く評価したい。今後も、大学入試センターにおいては、教科の平均点がばらつかないように、最大限の御配慮を願いたい。

3 ま と め

今年度のセンター試験も、例年どおり、基本的には我々の日常の教育活動を踏まえたうえで作問されており、取り上げられたテーマが世界史の学習において示唆に富むものであることは、率直に評価したい。

しかしながら、やはり例年と同様、知識・理解を問う無難な設問が多い。問題の作成に当たって、極めて多種多様の制約がある中で、意欲的に新たな問題分野を開拓することが困難な状況であるということは推察した上で、あえて苦言も呈した。それは、このセンター試験が入学試験のスタ

ンダードとして、全国の高校生にとっては世界史学習上の極めて重要な基準のひとつになっており、私たち高等学校世界史教師にとっても、授業の内容・方法等を考える上で、やはり重要な参考資料として受け止めているからこそである。センター試験が、より一層私たちの教育活動の指針にできるものとなることを願って止まない。

また、「世界史A」については、科目の性格・特性にやや配慮に欠く出題もみられた。「世界史A」は、教科書によって記述内容に大きな開きがある一方で、よるべき参考書や問題集がほぼない状況である。教科書でしか勉強ができない受験者への配慮をお願いしたい。

なお、例年指摘させていただいている各教科間、とくに「B科目」間の平均点のばらつきについて、今年度は最小限に留めていただいた。問題の難易度や他教科との平均点の差などの、いわば受験科目による「運・不運」によって受験の結果が左右されずに受験者の学力が評価され、極めて好ましい結果となった。関係者の方々に敬意を表するとともに、次年度以降も平均点のばらつきがないように努力していただきたい。

センター試験のより一層の充実を期待して、本協議会の提言としたい。